

ほうじょうこまちてい やすとき ときよりてい
北条小町邸 (泰時・時頼邸跡) 跡 (No. 282)

から出土した大型植物遺体および魚骨

雪ノ下一丁目 403 番 14 における土壤分析結果

例　言

1. 本編は、鎌倉市雪ノ下一丁目 403 番 14 において実施した、「北条小町邸跡（泰時・時頼邸跡）」（鎌倉市 No. 282 遺跡）の発掘調査成果のうち、土壤試料の分析結果に関する報告である。発掘調査地点の略号は、「H J K 1 3 0 4」である。

2. 土壤分析以外の成果については、下記文献において既に報告している。

・押木弘己 2017 「北条小町邸跡（No. 282）」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 33（第 2 分冊）』
鎌倉市教育委員会

3. 調査地点は北条氏邸（泰時・時頼邸）推定地の一画に位置し、調査では中世（鎌倉時代）における 3 時期の遺構変遷を確認した。

中世Ⅰ期は 13 世紀前葉と推定され、柱穴列や東西に走る区画溝、井戸などが検出された。

中世Ⅱ期は 13 世紀中頃と推定され、東西方向の区画溝や土器集積が確認された。炭化穀物の試料は、この段階に属する土器集積土坑（遺構 59）の埋土（98 層）から採取した（上掲報告書 105 頁上段の土層断面図、110 頁の平面図を参照）。

中世Ⅲ期は 13 世紀後葉～14 世紀前葉と推定される。土坑群が幾重にも切り合い、土地の利用状況は前段階から一変する。粘土床の上に焼土・灰・炭が堆積したカマド状遺構（遺構 81）はこの段階に属し、微細な灰・炭層（134 層）から分析用試料を採取した（上掲報告書 103 頁下段の土層断面図、107 頁の平面図を参照）。

北条小町邸跡から出土した大型植物遺体および魚骨

バンダリ スダルシャン・三谷智広 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

神奈川県鎌倉市に所在する北条小町邸跡は、鎌倉時代の遺跡である。ここでは、北条小町邸跡の堆積物から採取された大型植物遺体と魚骨の同定結果を報告する。

2. 試料と方法

分析試料は、北条小町邸跡の I 区中世下層の遺構 59 と II 区の遺構 81 (カマド状遺構) から採取された堆積物 2 試料である。

堆積物試料は、パレオ・ラボにて全量を計量し、0.5mm 目の篩を用いて水洗した。各試料の水洗量については、表 1 を参照された。大型植物遺体の抽出および同定、計数は、肉眼および実体顕微鏡下で行った。計数の方法は、完形または一部が破損していても 1 個体とみなせるものは完形として

数え、1 個体に満たないものは破片とした。計数が難しい分類群については、およその数を記号 (+) で表記した。試料は、鎌倉市教育委員会に保管されている。

3. 結果

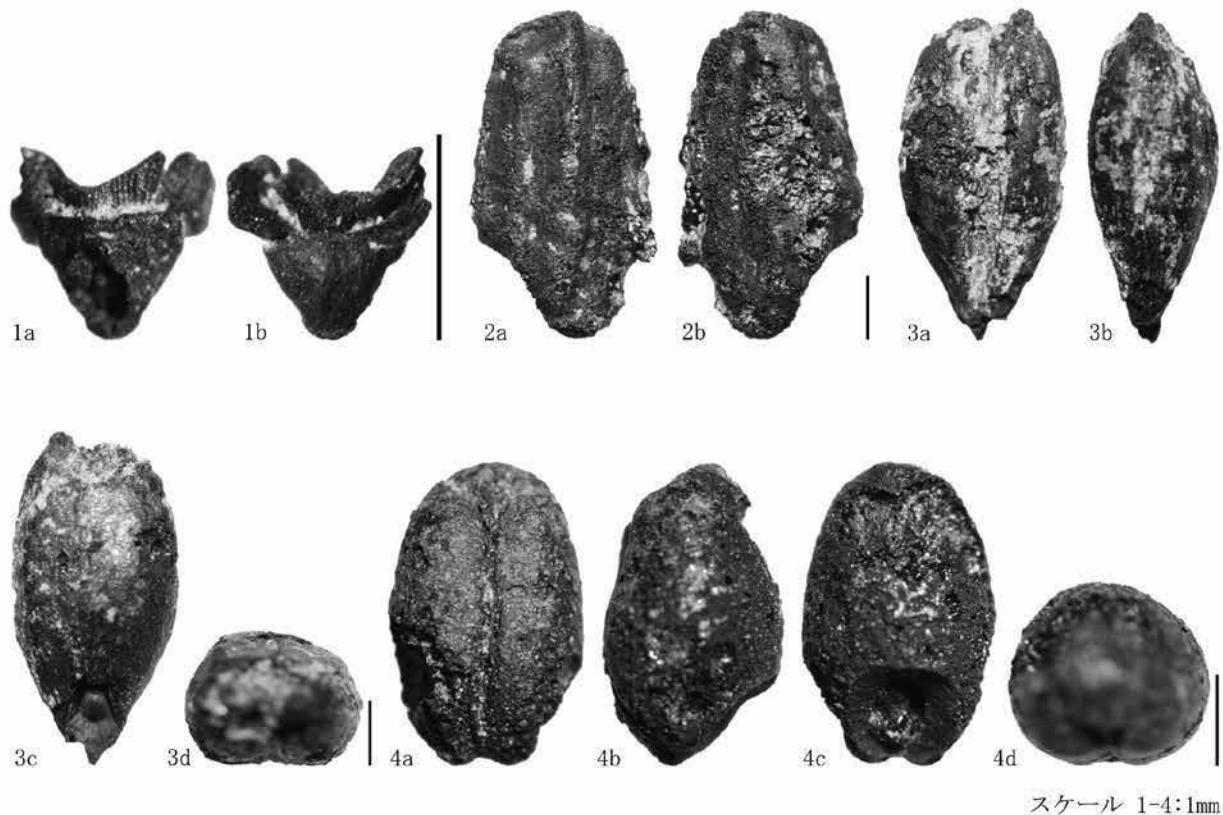
同定した結果、イネ炭化穀殻・炭化種子 (穎果) とオオムギ炭化種子 (穎果)、コムギ炭化種子 (穎果) の 3 分類群が見いだされた。この他に、残存状態が悪く、微細な破片であるため、科以上の細分に必要な識別点を欠く一群を同定不能種実・炭化種実とした。また、種実以外には、不明動物遺体が得られた (表 1)。このうち、II 区 81 (カマド状遺構) の動物遺体については、同定を試みた。結果は、硬骨魚綱 (種・部位不明) の微細な破片が 27 点であった。

以下では、同定された大型植物遺体の産出状況を試料 No. 別に記載する (同定不能炭化種実は除く)。

遺構 59 土壤 (98 層) サンプル：オオムギが少量、イネとコムギがわずかに得られた。

遺構 81 (カマド状遺構) 炭層 (134 層) サンプル：同定可能な種実は得られなかった。

次に、主な分類群の記載を行い、図版に写真を示して同定の根拠とする。なお、分類群の学名は米倉・梶田 (2003-) に準拠し、APG III リストの順とした。



図版1 北条小町邸跡から出土した大型植物遺体

1. イネ炭化穀殻（遺構59 土壌サンプル98層） 2. イネ炭化種子（遺構59 土壌サンプル98層）
 3. オオムギ炭化種子（遺構59 土壌サンプル98層） 4. コムギ炭化種子（遺構59 土壌サンプル98層）

(1) イネ *Oryza sativa* L. 炭化穀殻・炭化種子（穎果） イネ科

穀殻は、完形ならば上面観が橢円形で、側面観が長橢円形。縦方向に明瞭な稜線があり、基部は突出する。表面には規則的な縦方向の顆粒状突起がある。残存長0.9mm、残存幅1.0mm。種子（穎果）は、上面観が両凸レンズ形、側面観が橢円形。一端に胚が脱落した凹みがあり、両面に縦方向の2本の浅い溝がある。長さ5.1mm、幅2.9mm。

(2) オオムギ *Hordeum vulgare* L. 炭化種子（穎果） イネ科

側面観は長橢円形。腹面中央部には上下に走る1本の溝がある。側面観で最も幅の広い部分が中央附近にある。背面の中央部下端には三角形の胚がある。断面は橢円形である。長さ5.2mm、幅2.7mm、厚さ2.0mm。

(3) コムギ *Triticum aestivum* L. 炭化種子（穎果） イネ科

上面観・側面観共に橢円形。腹面中央部には、上下に走る1本の溝がある。背面の下端中央部には、扇形の胚がある。オオムギに比べて長さが短く、幅に対して厚みがあるため、全体的に丸みを帯びている。長さ3.3mm、幅2.6mm、厚さ2.0mm。

4. 考察

北条小町邸跡のI区中世下層の遺構59からは、栽培植物のイネとオオムギ、コムギが得られており、

保管されていた穀類がなんらかの要因で炭化して遺構内に堆積した可能性がある。II区の遺構81（カマド状遺構）からは、大型植物遺体は得られなかつたが、種や部位が不明の硬骨魚綱の微細な破片が含まれていた。

引用文献

米倉浩司・梶田 忠 (2003-) BG Plants 和名－学名インデックス (YList), <http://ylist.info>

コメント：試料分析の目的と結果について

押木弘己（調査担当者）

試料分析の目的と結果について、以下に述べる。試料検出遺構の基本情報は、例言にて説明した。

遺構 59 では完形資料を主体とする多量のかわらけが出土し、埋土とともに長さ 2 mm ほどの炭化粒が付着していた。穀物であろうことが目視でも確認できたことから、土器の洗浄水を篩にかけて炭化粒を選別、採取した。

分析の目的は穀物の種類を同定することで、その結果については前で説明されたとおりである。

炭化している点、および多量の完形かわらけとともに出土している状況を鑑みると、何らかの儀礼にともない、これら穀物が利用・廃棄された可能性が考えられる。

遺構 81 はカマド状遺構として報告し、底面上に焼土層および炭層が堆積していた。分析試料は炭層（134 層）で、主として遺構の性格を把握する意図により、魚骨など微細な動物骨が含まれていないか分析を依頼したものである。

分析の結果、詳細な魚種・部位は不明であったものの、硬骨魚綱を含むことが確認された。遺構 81 が食物調理にともなう火処施設であった可能性を窺えるが、「カマド状」と報告した当否も含め、なお類似例の蓄積と検討が必要と考える。

当発掘地点は北条泰時・時頼「小町邸」比定地の一画にあり、若宮大路御所の推定域にも含め得る。調査結果も武家屋敷地の一画と考えて支障ない内容であったことから、厨施設の存在を想定したことが、今回分析を行った第一の目的である。